

故郷・能登で育んだ 揺るがない心

——日本一に導いた左腕の原点

●人間健康学部 4年次生
米沢 友翔 さん (体育会野球部)

第75回全日本大学野球選手権記念大会を制し、1972年以来54年ぶり3度目の日本一に輝いた体育会野球部。その中心に立ったのが、最高殊勲選手賞(MVP)を獲得したエース左腕・米沢友翔さん。能登半島地震による故郷の被災、怪我、チームの低迷期——逆境を乗り越え、ドラフト候補として注目を集めるまでに成長。その歩みを振り返ってもらった。

●石川の自然で育った野球少年

石川県珠洲市の自然に囲まれた環境で育った米沢さんは、野球をしていた父の影響で、小学2年から野球を始めた。「本当に野球一筋でした。ゲームも好きではなくて、家の前でずっとキャッチボールをしていましたね。プロ野球選手になれたらいいなと思っていました」。珠洲市立緑ヶ丘中学校では軟式野球部に入り、金沢高等学校では投手と野手を兼任。投手として先発を任された2年春はベスト4、夏に県大会準優勝を経験したものの、全国大会出場には届かなかった。高校時代はコロナ禍や肩の怪我也有り、思うような投球ができない時期もあった。

関西大学に入学したきっかけは「高校の投手コーチが元阪神タイガースの選手で、山口高志さん(関大野球部アドバイザースタッフ)とつながりがあり、そのご縁で関大の練習に参加させてもらいました」。広いキャンパスや野球グラウンドの環境、先輩たちの気さくな雰囲気、進学を決めたという。学業面では、福祉やスポーツ分野を実践的に学ぶ人間健康学部で、身体の各部位の仕組みや食事・健康に関する知識を学び、「身体をどう使えばパフォーマンスが向上するのかを理論的に理解することは、野球にも役立ちましたね。短距離のスピードも向上しました」。



▲小学生野球チーム時代の米沢さん(前列中央)



LEADERS NOW!



●能登半島地震と野球への葛藤

1年次の正月、能登半島地震で故郷が被災する。「ちょうど帰省していて、祖母も含め家族全員が実家にいた時でした。午後4時10分、震度6強、強烈な揺れがありました。壊れた窓枠から外へ出ると、周りの家は潰れ、景色が一変していました。実家は山側で亀裂程度で済みましたが、海側の祖母の家は津波の被害を受けました」。

しばらくは野球に気持ちが向かず、身が入らない日々だった。「地元が大変な状況だったので、大阪には帰りたくない、珠洲に残ると両親に言いましたが、『あなたは大阪に戻って野球をなさい』と背中を押されました。その後も震災の報道は見たくなくて……あまり見ないようにしていました」。大阪へ戻ってからも、簡単には気持ちを切り替えられなかったが、チームメイトや先輩たちの支えで少しずつ向き合えるようになったという。

●投げられない苦しみ、自分との戦いを経て

その頃からチームはリーグ4季連続Bクラスの低迷期に。そして米沢さん自身も怪我に苦しんだ。2年次の春に左肩に違和感を覚え、「3年次の春の登板で痛めた時は、もう投げられないかもしれないと思いました」。手術はしない選択をして、リハビリに取り組んだ。

「トレーナーの方を信じてひたすらリハビリを続けました。先輩の金丸夢斗さん(中日ドラゴンズ)も大学時代に腰を痛めていたので、連絡してトレーニングを教えてもらうなど、少しでも前に進める方法を探しました。最終的には自分自身との戦いでしたね」。

チームは勝てず、自分も投げられない。3年次の夏頃からは周りが就職活動を始め、「母からは『石川に帰ってきてもいいよ』とも言われました。野球を続けるか本気で悩み、追い込まれていた時期でした」。



▲2026年侍ジャパン大学日本代表として初代世界王者に輝く



▲2026年第75回全日本大学野球選手権記念大会で優勝



米沢さんのキャップ、クラブと全日本選手権の優勝メダル▶



▲エース左腕の米沢友翔さん

●全国制覇へ。日本一への転機

怪我が完治し、完全復活できたのは3年次の秋だった。「痛みが完全になくなり、投げられることが本当にうれしかったです」。4年次の春のリーグ戦で先発復帰し、関西学院大学戦では、1安打無四球完封の準完全試合を達成。勢いに乗ったチームは5季ぶりのリーグ制覇を果たし、全日本大学野球選手権でも日本一に駆け上がった。

低迷していたチームが、全国制覇へと変貌を遂げた背景には意識改革があった。「主将を中心に、勝ちにこだわる意識がチームに浸透したと思います。練習内容は変わっていませんが、取り組む姿勢が変わりました」。選手同士で意見を言い合う関係ができたことも大きかったという。「特に4年次生を中心に、自発的に気づいたことを言語化して共有する雰囲気ができていましたね」。



▲堺キャンパスの体験学習エリアにあるアドベンチャー施設



▲堺キャンパスの正門前で

米沢 友翔——よねざわ ゆうと
■2004年石川県珠洲市生まれ。金沢高等学校卒業。2026年侍ジャパン大学日本代表。左投左打。憧れの選手はシカゴ・カブスの今永昇太選手。趣味は平成のドラマや映画鑑賞。好きな食べ物はハンバーガー。

●関大野球部で得た財産

試合では、山口さんからの「マウンドでは胸を張りなさい」という言葉を意識している。感情に振り回されず、まわりを気にしすぎないことは自分の強みだという。「マイペースすぎるとよく言われますが(笑)、投手向きの性格とも言われます」。

ドラフトへの注目が集まるが、米沢さんにとって最も身近な目標が金丸さんだった。「ドラフトで名前が呼ばれた時の金丸さんは、本当にかっこよかったです。『追いつきます』と金丸さんと約束しました。自分も指名していただけるなら、どの球団でも頑張りたいです」。

最後に大学生活について「小田洋一監督、山口さん、金丸さんをはじめ、たくさんの人に出会い、支えていただきました。震災や怪我など苦しい経験もありましたが、この4年間で人としても強くなったと思います」と振り返る。「珠洲でのびのびと育ったことが、どんな状況でも動じない自分の強さの原点です。故郷のためにも、これからも頑張りたいです」。

多くの壁を乗り越えた左腕は今、プロへの道を視界にしっかりと捉えている。